

看護学生と若手設計者が考える 理想の病院

医療・福祉施設の設計者は、より質の高いケアやサービス、療養空間としての快適さを患者や利用者に提供したいという医療者の希望をできる限り実現しようとする一方で、コストや敷地面積、工期など様々な制約も考慮しなければなりません。本誌「アーキテクチャー保健・医療・福祉」欄で紹介している医療・福祉施設は、いわば理想と現実の間で、少しでも理想に近づけようという、設計者と医療者の努力の結晶とも言えます。

では、もし上記に挙げたような様々な制約がなかったとしたら、「アーキテクチャー」欄の編集協力委員である笈淳夫氏(国立保健医療科学院 施設科学部長)ならびに中山茂樹氏(千葉大学工学部 教授)のご協力をいただき、「看護学生に“理想の病院”についてディスカッションしてもらい、そこで出されたテーマについて、若手設計者がイメージを膨らませ、設計プランを描く」という新連載のコンセプトが決定しま

した。本連載「看護学生と若手設計者が考える 理想の病院」では、今年1年にわたり、12名の設計者による設計プランを紹介していきます。

2010年8月2日、聖路加看護大学の一室に、野田有美子氏(同大学看護管理学)の声かけで、3～4年生の看護学生が12名集まりました。進行を務めるのは笈氏ならびに小菅瑠香氏(国立保健医療科学院 研究員)。最初に、笈氏が用意した様々な写真——病院の写真だけではなく、歴史的建造物や近未来的な建物、森や海といった自然、外国の風景——がスライドで映し出されました。“病院”という枠にとらわれず、どのような時、人が“快適さ”や“癒し”を感じるのか、想像力を刺激されます。その後、4名ずつのグループに分かれて、ディスカッションが始まりました。

すでに実習等で実際の病院を体験しているため、そこで感じた「窓が閉まっていて閉塞感がある」「院内には家族の居場所がない」「医師や

理想の病院 12テーマ(掲載順不同)

- ①ゆとりがある
- ②文化を感じる
- ③子どもがわくわくする
- ④四季を感じる
- ⑤赤毛のアン
- ⑥家族とともに(次号予定)
- ⑦医療者と患者の壁がない
- ⑧地域と交流のある
- ⑨アットホームな
- ⑩リゾート風な
- ⑪自然を感じる(今月号掲載)
- ⑫時を感じる

看護師と、患者さんのいる病室が隔離されすぎている」といった学生の視点からの率直な感想が挙げられ、一方で「リゾートっぽい病院」「病室がコテージ」「赤毛のアンみたいな…」という若者らしい話題でも盛り上がりました。

そして各グループのプレゼンテーションを経て、選考の結果、理想の病院について表の通り、12のテーマが決定しました。これらのテーマが設計者の手によってどう形になるのか、ご期待ください。

(本誌編集室)



ディスカッションを終えて